あ と が き

公益財団法人中央教育研究所
所長　三光 穣

第39回「東書教育賞」を受賞された先生方、誠におめでとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

審査機関である中央教育研究所から、今回の応募・審査に関するご報告とご挨拶を申し上げます。

中央教育研究所は、1946年に東京大学の海後宗臣先生らが中心となり、東京帝国大学の岡部教育研究室を引き継ぐ形で設立された民間の教育研究所です。設立の年に「アメリカの新教科書に関する展覧会」を開催、翌年には地域カリキュラム「川口プラン」を発表し、戦後カリキュラム運動の中心的な存在になりました。1953年には文部省所管の財団法人として認可を受け、その後も教育実践に関する調査研究を続け、2012年に、内閣府より公益財団法人としての認可を受けました。

現在、研究所では、公益目的事業として、「今日的な教育課題に関するシンポジウムの開催」事業、「教育に関する調査研究」事業、「教科書研究に対する奨励金助成」事業、そして、「東書教育賞」の論文審査および論文集の発行を行っています。研究成果をまとめて教育現場等に発信する研究報告は、1973年に第１号を発行し、昨年、第100号『子供の学びが広がる学習者用デジタル教科書』を発行いたしました。

さて、第39回「東書教育賞」は、昨年10月20日に論文応募を締め切りました。今年度は、125編の応募をいただきました。

厳正なる第一次審査を経て、12月13日に最終審査会を開催し、小学校部門・中学校部門の各賞を選出していただきました。

応募総数125編の内訳は、一般部門が105編（84％）、ICT活用部門が20編（16％）となりました。ICT活用部門の応募が昨年の27編から減少しましたが、審査を担当された先生からは、今回の論文はトータルな実践の中でICTがうまく活用されており、優れたものが多かったと感じる、とのご意見がありました。

学校種から見てみますと、応募総数125編のうち、小学校70編、中学校51編、小中一貫校・義務教育学校４編で、論文内容での小・中学校の比率は56％対44％となり、昨年度と比べて中学校の占める割合が増加しました。

「小中別・教科領域別応募数」の傾向を見ますと、小学校では、算数が12編、学校経営・学級経営が11編、「総合的な学習の時間」が８編、国語が７編と続いています。中学校では、社会が10編、理科が８編、「総合的な学習の時間」が７編と続きます。

論文タイトルについて際立った特徴は見いだせませんが、毎年のように大規模な自然災害が各地で発生している状況のもとで、入賞には至りませんでしたが「防災」に関する論文が数編ありました。また、「今日的な教育課題」といえるキーワードを含む論文としては、「自由進度学習」が３編あり、中学校部門で「中学校歴史分野における単元内自由進度学習の実践」が奨励賞を受賞しました。

応募の形態ですが、今回は「個人」での応募が106編、「学校・グループ」での応募が19編でした。昨年度の「学校・グループ」での応募は13編ですので、「学校・グループ」での応募が増加しています。

応募の地域についてですが、北海道から沖縄、海外の日本人学校を含むさまざまな地域からご応募いただきました。最優秀賞は、今回小学校部門の１編、兵庫県稲美町立加古小学校の吉田博明先生（「学

校・グループ」での応募）が受賞されましたが、兵庫県の先生が最優秀賞を受賞されるのは、2007年度の第23回以来２回目となります。

最後に、ご応募いただいた方の年齢層に関しましてご報告いたします。

年齢層は、20歳代が９名、30歳代が33名、40歳代が30名、50歳代が41名、60歳以上が12名でした。概ね、各世代からまんべんなくご応募いただいています。多くの先生方に支えられ、「東書教育賞」の今日があるということだと思います。誠にありがたいことです。

以上、第39回「東書教育賞」の応募状況に関してご報告いたしました。来年度は第40回という節目の年になります。多くの先生方のご応募をお待ちしております。